
光に向かって

前田広大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光に向かって

【Nコード】

N2684I

【作者名】

前田広大

【あらすじ】

数百年後の地球。中国周辺を占領した魔物「闇獣」。それらは闇の中で超常の能力を得る。ある日湘南に住む少年の元に『闇を恐れる闇獣の少女』と『闇獣に育てられた光を生み出せる少年』がやって来て……

プロローグ：光と影と闇（前書き）

中の人『たこ野郎』 原案のネタをふくらませました。

プロローグ：光と影と闇

光に向かつて生きていくのは難しい。特にこんな混乱した世の中では、まばたきをしている間に光に向かつていたはずが正反対に向いているなんて事もザラだ。 > i3544—591 <

西暦も2500年を数えた頃。今この世界には三種類の知的生物がいる。まず俺のような人間。そして、二種類の魔物。

魔物の一つ目は闇獣^{あんじゅう}。暗闇の中では恐ろしい能力を持つ。ただ、少しでも光があると力を失い、人間と同じ姿になる。別に光の中で人間として暮らしてもいいんじゃないかと思うが、連中はそれを良しとしなかった。

闇獣の侵略^{しんげあく}が始まったのは20年ほど前。南米のジャングルからだと推定されている。光の中ではヒトのような姿であることで、連中を自由に移動させる事になってしまった。しかし、夜、完全な暗闇になるような街は少なかった。それによって、一時は助かるかと思われた。

だが、そんなに運命は楽ではなかった。続いて表れたのが闇獣に従う二番目の魔物、影獣^{えいじゅう}だ。文字どおり影の中で超常能力を持つ。影なんてあちこちにあるから、影から遠隔攻撃されたら終わりだ。闇獣よりは能力は強くないが、人間よりは強い。そして、彼等は照明機具を片っ端から壊し出した。

国境は廃絶されている世界。そして、世界政府は「光政」という影獣と戦う組織を作った。人間の科学力の全てを注ぎ込んだ武器を持ち、影獣やジャングルにいる闇獣と戦った。

5年にわたる戦いの末、魔獣は完全に夜は闇になる土地をユーラシア大陸東部（中国とモンゴルと朝鮮半島のあたり）に得て、そこに定住するようになった。

しかし、それによって不利益を被^かった者が、滅ぼされ、追い出された中国人・モンゴル人・韓国人以外にいた。誰あろう影獣である。

なぜか？ 簡単な事だ。影は、光があつてこそできる物だから。光と影は決して交わらないが、お互いが必要とする物だった。

闇獣は高い知恵をも持ち合わせていた。全てが策略だったのだ。力を失った影獣は闇獣の奴隷とされてしまった。

そして影獣の一部は、人の世界に逃亡した。ある者はヨーロッパに、あるものはアメリカに、そしてある者は…… こともあるうに、俺の家のすぐそば、かつて日本最初の武士による幕府が置かれた場所、南を海、北、東、西を山に囲まれた天然の要害………
… 鎌倉に。

人の世界で、影獣は暮らした。鎌倉の影獣は、鎌倉で人間と共に暮らした。人はすぐに慣れていった。… 「光政」以外は。「光政」は、魔獣全てを絶対悪と考え、影獣に攻撃を加え続けていた……

プロローグ：光と影と闇（後書き）

〓 次回予告 〓

俺の家に突然やってきた旅人は、謎の中国人。ってちょっと待て、中国人は魔獣に滅ぼされたんじゃないのか！？
次回、第一話『旅人』。

第一話：旅人

- - - 2510年8月：日本・神奈川県 湘南 - - -

辺りはもうすっかり真つ暗になったところ、窓の外を動く光が見えた。その直後、俺の家のドアがノックされた。

「はい……どなたでしょうか。」

そこには、10代から20代前半ぐらいに見える男と、フードをかぶった少女が立っていた。男が遠慮がちに口を開く。

「中野……さんですね？」

「はい。」

「私、光陽妖と申します。中野空^{みづ}さんは御在宅ですか？」

「いえ、父は……一ヶ月前に死にました。」

男は驚いたような顔をした。

「父に何の用で？」

「えー、私は中国から来た者で……」

「え……中国って、…影獣の方ですか？」

今は中国にいるのは影獣だけのはずだ。

「いえ、……中国人ですよ？」

「え？中国人って……」

もう皆殺しにされたはずじゃなかったのか？

「すみません、説明が足りなかった。私は、闇獣に育てられた人間なんです。」

「闇獣に？」

「闇獣に中国が侵略された頃、私の母は私を身ごもったまま戦士として戦っていたらしいのです……」

男はゆっくりと話した。

「母はある時、なぎなたをあやつる敵と戦いました。その敵というのが、わたしを育ててくれた闇獣です。母は敗れ、死にました。そ

の時にその敵は、赤ん坊の泣き声を聞きました。それが、私の声だったのです。母は臨月でした。私は母の胎内で生きていたのです。その闇獣は、私を母の腹を切り開いて取り出し、家につれて帰りました。母を倒すまで、妊娠している事に気付かなかったそうです。

……そして、わたしは育ちました。」

「……」

「しかし、闇獣は昼間は人の姿をしているのですが、夜は姿が変わるので私が人間である事がばれてしまいます。しかし、天は私に味方しました。私はおそらく親から伝わったであろう魔法の能力を持つていました。それも、変身と、光を生み出す能力。さらに、その家には闇を恐れる闇獣がいたのです。」

「闇を恐れる闇獣？そんな奴がいるんですか？」

「ええ。それがいま私の後ろにいる少女です。」

「……で、数百歩譲ってその話を信じるとして、何の用でここに来たんですか？」

「ああ、実は、私たちはこれ以上中国にいつづけるのは難しいと考えて、影獣と一緒に密航してきたのです。それで、船の中で会った影獣の方に空さんのことを聞いて、訪ねてきたのですが……今晚だけでも泊めていただけないでしょうか……」

「……親父はどんな噂をたてられてんだ。まあ、いいです……」

「助かります。」

こんな気軽に返事してしまったことで、俺はとてつもなくややこしいことに巻き込まれることになってしまふのだが、このときはまだ知る由もなかった。

第二話：少女

少女の名はハルカ。俺と同じ15才だそうだ。なんかちゃん付けで呼ぶのが一番しっくりくる感じ。可愛い。透き通るような白い肌。長い髪はポニーテール。黒く輝く瞳。言語では説明しきれない可愛さ。（ハルカの容姿設定にはかなり作者の個人的趣味が含まれています。御了承下さい。）そして陽妖も同い年。老けてる。陽妖は実際に光を出してくれた。どうやら向こうに住んでいられなくなつて、影獣に混じつて渡つて来たらしい。

「ところで、中野さん、下の名前はなんとおっしゃるんですか？」

（陽妖）

「ああ、申し遅れた。俺は中野陽^{ひかる}。ヒカルって呼んでくれ。」

「おや、同い年って分かつた瞬間言葉がくだけた。」

あはは、とハルカちゃんが明るく笑う。可愛い。闇獣って怖いイメージがあつたけど、人間の姿の時は普通なんだな。ハルカちゃんはずつとこの姿でいて欲しい。そしてずっと俺のそばに……って俺は何を考えてるんだ？

「あのー、ヒカルくん？」

「つうあ？あああゴメン……」

「何が？」

しまつたいきなり墓穴掘つた。しかしくん付けって破壊力あるんだな可愛い娘が言つと……ってまた俺は……どうしちゃったんだ？

「あゝ、いきなりでビックリしてつい。」

「……ヒカルくんっておもしろいね。」

面白いなんて言われたのいつ以来だろう。

「……ありがと。で、何？」

「よろしく、ね。」

「……ああ。よろしく。」

確定。この二人はできるだけ長くうちに住んでもらう。何がある

うがハルカちゃんが可愛いから許す。

しかし……どうやら俺はハルカちゃんに惚れてしまったようだ。え？分かってるって？まあこんだけモノローグで言ってたらな。

「おいヒカルー、戻ってこい。」

「あん？」

「さっきの自己紹介じゃ足りんやろ？」

「なんで中国人なのに関西弁？」

「作者の勝手なイメージだ。」

「おいおいなんだよそれ」

「ま、笑い話とか恋バナとかしとこうぜ。まだ夜は長いで。」

「恋バナはやめとくさ。」

俺が好きなのはハルカちゃんだから。

「私もちよつと……」

「それ以前に恋愛経験作るの大変だよ俺とハルカは。」

「あたしは恋してるもん！」

「何！？」

それは知りたいような知りたくないような……

ギャーギャーと（主に陽妖が）騒ぎつつ、湘南の夜は更けていく。

第三話：力

「あ、そうだヒカル。」

「何だ唐突に俺寝不足なんだそして寝起きは頭働かないんだ手短かに頼む」

「ああ。その読みにくい文章見てたらずぐわかるわ。」

「読みにくいだあ？会話じゃねえか誰が読むんだ脳みそコワレてんのか。」

「脳みそ壊れてんのは木d…もといお前だ。読者の存在を何時たりとも作家は忘れちゃいかn…」

「あにいつてんだ？俺もお前も作家じゃねえよ登場人物だ。つかこれ作者が読者と登場人物置き去りにしてねえか？」

「……とりあえず騒ぐのはそのくらいにしてヒカルは顔洗ったらどう？」

…鶴の一声つてのはこういう事を言うんだろう。二人ともだまきこくった。俺の女神ハルカちゃん。彼女の顔を見るだけで目が覚めた。といつてもそう言つて二人を納得させる訳には行かないから、俺はまだ寝ぼけてるようなフリをしつつ洗面所に向かった。

「…で、何だ？」

「ああ。実は……『光政^{こうせい}』がこの辺にもやってくるらしいんだ。」

「光政が？」

光政。影獣を「絶対悪」とみなし『狩る』政府組織。最初は影獣の犯罪者のみを摘発する強い力を持った警察組織だったが、だんだんと影獣だと言っただけで摘発、殺害するようになった。気に入くない。気に入くないけど悔しいが誰も力で奴らに勝てないし、説得に応じる連中じゃない。

「……で何で昨日来たばかりのお前がそんな事知ってるんだ？」

「ここに来る途中で聞いた。」

「そつか。……でも、人間と闇獣のおれたちにはあんま関係ないか？」

「何言つてんだ！！罪もない影獣が狩られんのを指くわえて見てろつてのか！！」

「んなこと言つたつて……」

「私たちと一緒に渡つて来た影獣の人たちもいるの。大事な親友。守りたいの。手伝ってくれない？」

「そうか、そういえば影獣に混じつて渡つて来たんだよな。まあハル力ちゃんの頼みなら喜んでだ。」

「……で、どう戦うんだ？」

「そうこなくちゃ！」

「ありがとう。」

「じゃあ、とりあえず目瞑つて呼吸を落ち着かせてくれ。」
何をするんだ。

突然、目を瞑っているのに周りのはつきりと明るく見えて来た。陽妖が目の前にいて、俺に向けて手をかざしている。その手が激しく光り……俺の体も光りだした。陽妖は呪文のような物を呟いている。いや、これは中国語だ。

「光、人世的時候到連終照。給予我力量。給予賜予這個人光的力量。授予適合這個人的特性的力量。……放光！（訳：光よ、この世のさいはてまで照らせ。我に力を与えよ。この者に光の力を与えたまえ。この者の特性に合った力を授けよ。輝け。）」

最後の言葉が終わった瞬間、俺と陽妖のからだに激しく光り、俺の全身に何か妙な力がみなぎるのを感じた。

「完了だ。」

「いや、これ何だよ？」

「お前に光の力を分けたんだよ。えっと、お前は属性が俺からの『光』で……特性能力が『移動』だから、『一番近い所にある光源に移動できる』だ。」

「え、それ戦うのに……」

「ああ、あと光弾も使えるから。」

「どうやって出すんだ？」

「念じるだけだ。光弾の場合手を標的に向けて、掌から力が飛んでいくイメージだ。あと特性能力……つまりお前の場合『光源への移動』は、『発動』と唱えるだけだ。」

なんかいまいわからんが、やってみるしかなさそうだ。

第三話：力（後書き）

〃〃次回予告〃〃

いよいよ光政との最初の戦いだ！
ってヤバイやられる！！
誰か助けてー！！！！

次回、第四話『光政』。

第四話：光政

崖の上。状況を簡単に説明するとこの一言だ。東京に本部がある光政が派遣されて、影獣の集まる町へ向かう道。あえて人気のない道を通るらしく、古い切り通しを通って町に入ってくる。おれたちはその切り通しの脇の崖の、木の根や枝の上で光政を待ち受けている。道は巨大な岩で塞いだ。狭い道で塞ぎやすい。千何百年か前の武士と、それを千年以上とっておいた住民に感謝するしかない。

> i 3 5 4 5 — 5 9 1 <

そのうちに、光政の斥候（せうこう）（部隊の先に立って道の先の状況などを調べる役）がやって来た。

「おや、土砂崩れだ。本隊にれん……」

本隊に連絡されたら元も子もない。陽妖と二人で、予想外の妨害に驚いている斥候役の隊員の後ろに気配を消して降り立つと、後頭部に鈍い一撃をかました。気絶した隊員は崖の上の道から少し離れた木の影で眠ってもらった。

やがて、何も知らない第一部隊がやって来た。より慎重に息を潜める。

「全員止まれ！」

号令をかけたのが隊長のようだ。

「土砂崩れだ。まったく、斥候は何をやつとるんだ。」

斥候は今すぐその木の影で眠っている。仕事はちゃんとやっていた。

陽妖と同時に小隊の隊員たちの中心に光弾を放った。そしてすぐさま陽妖が特殊な光弾で隊員たちの目を眩（くら）ませる。陽妖と二人、タイミングを合わせて飛び下りる。二人同時に隊員たちに奇襲をかけた。光政は、機動隊や自衛隊の訓練設備や装備を使い、かなりの戦闘能力を持っている。奇襲でもかけないと、十数人の小隊をふたりで倒すのはかなり難しい。この流れはハルカちゃんが数分で考えた

物だった。彼女の頭脳には脱帽だ。今彼女は家で俺たちの武運を祈っていることだろう。ついて来たがったが、余りにも危険なので止めた。

5人は倒した。その後だった。さすがに疲れが出ていたんだろう。一瞬背後がおろそかになり、そのスキをつかれた。

「ヒカル、後ろだ！」

陽妖の声で振り向いた時はもう遅かった。倒れていた隊員がふらふらと起き上がり、光弾で壊れたショットガンを振りかぶり、俺の頭めがけて降り下ろすところだった。

よけられない。本能的にそう感じた。最低限の回避行動をとりつつ、思わず目を閉じた。覚悟は斥候を倒す前にすでに決まっていた。なぜか、気温が2、3度下がったように感じた。そして…

俺の意識が消失……しなかった。

いつまで目を閉じていても、来るはずの鈍痛は来ず、代わりに俺の頬^{ほほ}を冷たい風^{かす}が掠めた。

おそろおそろ目を開ける。真っ先に目に飛び込んで来たのは龍のようなうねる青いものだった。そしてその向こうに、縦に細長い背中と、鎧^{よろい}ごとまっ二つになった俺に殴りかかった隊員があつた。

「タムラさん!？」

陽妖が叫ぶ。どうやらタムラという人物らしい。と思つたが刹那、周りに残っていた隊員たちが一気に切り裂かれた。そしてタムラと呼ばれた人物が、ゆっくりとこちらを向いた。

その時、俺は初めてその人の姿をはつきりと見た。190cm以上ありそうな長身、全体的に中性的な姿で、かろうじて男ではないかと思える程度だった。そして目につくのは真っ青な長髪。長身にもかかわらず膝より少し下ぐらいまであり、ポニーテールのように結ばれていた。最初青い龍のように見えたのも無理はない。そして、透き通るように白い肌。白と青という寒冷色の組み合わせのせいか、

はたまた本当に周りの温度が低いのか、涼し気な雰囲気をもとっていた。顔だけは、モンゴル系とウイグル系の中間のようで、ギリシヤ人のようで、でも日本的な、不思議な顔たちだった。そして、2mほどありそうな太刀^{たち}を鞘^{さや}に入れて、後ろを地面と80°ぐらいにして左手に持っていた。

突然、彼がぽつりと口を開いた。

「危なかったな。」

「あ……どうもありがとうございました。」

「例には及ばん。俺の都合で調子にのったバカ共を切っただけだ。お前が俺にとって都合が悪い存在なら、お前も切る。」

冷酷そうな低い声だった。そしてしばしの沈黙。

「あー……えっと………」

沈黙にたえきれず、陽妖が口を開く。

「とりあえず初対面の二人は自己紹介でも……」

「ヨシユキ・P・多村だ。……よろしく。」

「どうやら日系のようだ。」

「中野陽^{ヒカル}です。よろしく。」

差し出された右手を、しっかりと握った。

第四話：光政（後書き）

どなたか人の絵が描けない私に変わって挿し絵を書いて下さるとうれしいです。外見は文中の表現と独断でお願いします。できればみてみんなにUpしてもらえれば喜びます。ユーザページから送れるメッセージで知らせて下さい。

第五話：勇者

光政の隊員たちの死体は、崖の上にまとめて埋めた。ただ、気絶していたはずの斥候はいなくなっていた。逃げたようだ。

土砂崩れをタムラさんの斬激で退け、影獣の人たちの住む町へ向かった。

前をスタスタと歩いていくタムラさんの後ろを五歩ぐらい離れて俺と陽妖がついていく。ふと、陽妖に質問してみた。

「なあ、タムラさんってなにものなんだ？」

「影獣と人間のハーフで、父方の先祖はすごい剣士だったらしい。で、影獣の身体能力であんだけ強くなってる。」

「たしか影獣って肌が白いほど……」

「能力が強い。つまりタムラさんはかなりすごいよ。」

「あとさ……」

握手した時から気になっていたことがあった。右手で握手したが、刀を持っている左手の手首に、無数の平行な切り傷があったのだ。まるで……リストカットのように。

「ああ、あれはな……」

影獣は影の中で力を発揮する。でも、自らの力をコントロールできない影獣がたまにいる。タムラさんもその一人だった。

「……で、暴走して仲間まで切りかねない自分を抑えるために、持っていたナイフで……」

すさまじい人だ。

「でも、いい人だよ。ただ、昔仲間の一人を失った時、仲間がいるとこんな悲しみを味わうのなら仲間なんていらなくないと考えて、人に冷たく接するようになったんだ。」

「でも、陽妖たちは仲間なんだろう？」

「……ああ。」

大きな鳥居の前から町をまっすぐに貫く道に出た時、大歓声がおれたちを包んだ。なんだ？と思っていると、これまた肌の白い、皺だらけの老人が進み出て、やたらうやうやしく礼をした。そして。

「ようこそ、勇者殿。」

思わず目が飛び出しそうになった。ああ、もちろんただのたえだ。デメキンのような顔にはなりたくない。だが、オレたちが勇者？驚天動地だ。きょうてんどうち いやこの二人はいいとしよう。でも、なぜオレまで勇者なんだ。……なんて事を言うわけにいけないから、とりあえずその称号を受け入れた。

老人が大通りの歩道を歩き出した。どうやら浜に向かっているらしい。

200mほど歩いた時だった。横の道から男が飛び出してきて、親しげにタムラさんに話しかけた。

「Hey, YOSHIYUKI!! What did you do? (よおヨシユキ!! 何やってたんだ?)」

金髪碧眼の、いかにも『外人』という感じの男が現れて、タムラさんに親しげに話しかけた。

「I was fighting. (戦ってた。)」

タムラさんは平然と答える。

「H A H A H A!! 誰と戦うてんだ!？」

「光政」

「……What? What did you say? What do you mean? (は?なんつた?どういう意味だ?)」

男は眉を潜めた。しかし、日本語もしゃべれるのか?さつきペラの日本語だった。

「おい、答えるよYOSHIYUKI!!」

何だこのエセ外国人みたいなしゃべり方は。そしてなんだその2000年代の14人の大人気ダンスグループのメンバーみたいな呼び名は。一しかし、ただならぬ雰囲気だ。

第五話：勇者（後書き）

〓 〓 次回予告 〓 〓

『エセ外国人』ジョンスミスこと名前をよく間違えられるジャック・
ジョンソン（以下「J・J」）とタムラさんを含めたおれたち五人は、
仲間として光政と戦うことになった！

次回、第六話『仲間』。

第六話・仲間（前書き）

めっちゃくちゃ間開いてしまいましたすみませんm――m

第六話：仲間

いきなり飛び出してきたジョンスミス（仮名）は、タムラさんの鋭いチョップ（45度）で落ちついた。昔のテレビか。そいつはジャック・ジョンソンと名乗った。ジョンスミス並に平凡だ。偽名っぽいが。なにやら、光政に恨みか何かがあるようだ。まあ、後で聞けばいいか。

結局何だかんだでその「J・J」もついてきて、俺たちは長い道をするのろとなんとか歩き終えて浜に出た。

「なんだこりゃ!？」

浜にあったのは、巨大なテントだった。テントというか、「天幕」という感じ。

「お疲れでしょうから、お休みください。ジャクソンさんもよろしければどうぞ。」

「だからジョンソンだっつってんだろ!?!？」

「おちつけジョナサン。いいじゃないかどっちも」だろ?」

「てめえもだタムラ!!」しかあつてねえ!!」

またタムラさんの45度が炸裂した。

「こちらに広い部屋と、個室もいくつかあります。」

老人がひとしきり説明を始めた。

「また、こちらには次に出かけられる時のために乗り物も用意してございます。」

そこにあつたのは

「セ ウエイ!？」

そこにあつたのは、どう見ても21世紀初頭に発明された画期的な移動機器だった。

老人が去ったあと、Ｊ・Ｊといつの間にか現れたハルカちゃんを含めた俺たち５人は広い部屋に集まってしばらく話していた。

「そういえばＪ・Ｊさんは何者なんですか？」

ふと思いついて、素朴な疑問をぶつけてみた。

「略すな。俺はな」

ちよつとの沈黙。そして緊迫した空気

「タメすぎだ極光。」

それを打ち破ったのはタムラさんだった。

「ＡＡＡＡＡＧＨ！！　勝手に言うな！！　せつかくもったいつけてたのにー！！」

極光。悪事を働いた魔獣のみを取り締まる、民間組織だ。魔獣すべてを絶対悪と考え、しかも強い闇獣は避けて影獣を主に「狩る」光政とは敵対している。メンバーは世界屈指の戦士や魔術師、はたまた影獣や闇獣または魔獣と人間の混血などで、「世界最強」と言われるエリートたち。なのだが…

「イメージ壊れるなあ」

Ｊ・Ｊは全然そんな感じではなかった。ああ、あと、実は魔獣と人間は子供を作ることができる。混血児もけっこういるが、どちらの社会にも入り辛いという問題がある。ちなみにタムラさんも混血らしい。まあつまり、俺とハルカちゃんは結婚できるということだ。当然子供もすることをすれば　って俺は何を考えてるんだ？

こんな会話のあと、Ｊ・Ｊがこんなことを言い出した。

「そういえば、お前からこっちに侵攻してきた光政と戦ったんだよね？　なんか光政が最近活発に影獣の街の「狩り」をしてるらしいんだ。」

「どういうことだ？」

一瞬で真面目な顔になったタムラさんが尋ねる。

「どうもこうも、そのままだよ。『上』は、影獣を滅ぼそうとしてるんじゃないかと疑ってる。」

それが本当だったら

「ただ見てるわけにや、いかねえな。」

見事に俺の思考と陽妖の言葉がシンクロした。

「そうだな。どうだ、極光の外陣部隊として、光政と戦ってみないか？」

「J・J」が提案する。反対するものなどいるはずがない。「J・J」を中心として、俺たちは仲間として共に戦う誓いを交わした。

第六話：仲間（後書き）

〓 次回予告 〓

光政と戦うためには、もっと強くないといけない！
修行を始めた。俺たちは

次回、第七話『修行』。

第七話：修行

「とりあえず、修行とかしといたほうがいいよな？」

陽妖の一言で、俺たちは『修行』をすることになった。

ところで、陽妖などの光系能力者（魔術師や力を付与されたもの、つまり俺も）は、その応用で『影』『闇』も作れるらしい。それによつて、タムラさんは力を得る。ちなみにタムラさんは運動能力と動体視力がすさまじく、しかも能力を得るとそれがさらに強化される。だからあんなに強いわけだ。

あと、Ｊ・Ｊも魔術師なんだそうだ。と言っても、陽妖のような『自然力系（光や火などを操る）』ではなく召喚魔法や様々な俗に言う『魔法』を使うらしい。そしてハル力ちゃんはちよつとがまんして闇に入れば治癒魔法が使えるらしい。

俺は、光弾と光源への移動の他に、光系の能力をいくつか陽妖から習うことにした。

タムラさんは、陽妖の作った影の中で、陽妖やＪ・Ｊの出した人型と戦い続けている。相変わらずすごい腕だが、本人はまだ納得していないらしい。俺は影を作る練習を、時々軽食や飲み物を配って回っているハル力ちゃんに話しかけたりしつつ、戦いながらも集中して作りつづけられるようにしていた。ハル力ちゃんに話しかけていたのは何かしながらでもやりつつけるためだ。話しかけたのもあることはあるが。

そんな日々が何日か続いた。

ある日の事、俺はふと、長年抱いてきた疑問を思い出した。

「なあ、闇獣って、何者なんだ？」

ちようど話している途中だったハル力ちゃんに聞いてみる。人間

の社会に住んでいると、わかるのは能力を持つことと、人間にとってもよく似ている事くらだ。影獣や闇獣は、どこから来た何者なのかなんて分らない。

「それが、私たちもよくわからないの。気がついたらそこに存在していて、この世界で活動し始めていたって大人たちはみんな言うの。わたしは物心ついたころには大陸にいたし」

そう。魔獣と人間の戦いがあつたのは俺達が生まれる前。その時のことは分らない。タムラさんやJ・Jはその戦いに参加していて、その中で出会ったらしい。といっても彼らも魔獣の始まりについては知らないそうだ。この後にだんだん明らかになるのだが、まだ知る由もなかった。

数日後。いつものように修行しているところに、影獣が一人テレポートして現れ、俺たちに告げた。

「東部から光政の部隊がここに向かってきています。長老は今こそ出撃し敵を討ち滅ぼすべきではないかとの考えです。」

俺達がどうするかなんて分かりきった事だ。

「よし、行くぞー！」

陽妖が俺たち五人の気持ちを代弁するように叫んだ。誰も異論を唱えるものはいない。

すぐに天幕にもどり、全員が空中浮遊とか高速移動とかできるようになった最新型セ ウエイにのりこみ、東部に向かった。

そう、そして、ここから俺達の長い戦いは始まったんだ。

第七話：修行（後書き）

〓 次回予告 〓

ニューヨークから「」とテレビ電話する少女……えっ！？ この娘が極光の副司令？
次回、第八話『極光』。

第八話：極光

――アメリカ・ニューヨーク 旧国連本部ビル――

「そういえば軍曹、ジャクソンたちの今の状態は？」

「あの ジョンソンのことでしょうか？ 副指令殿。」

「そうそのダビッドソン。言葉遣いと冷静さが残念な感じの。」

「だからジョンソンです。たしか今は日本のカマクラにタムラ氏と
」

「そんな事はわかっています。それで今なにをしているのかを聞いているのですよ？」

「しょ、少々お待ちください！」

軍曹と呼ばれた男はすぐそばの端末に取り付いて、交信画面を立ち上げた。まだつながってはいない。

「やれやれ、彼は頭が残念な感じね。」

副指令と呼ばれていた、紫がかった青い髪の美少女は嘆息した。

「しょうがないさ。お前と違ってすべて覚えておくということは出来ないんだから。」

ディスプレイだけがぼんやりと光っている薄暗い室内で、さらに暗い所に立っている男が低い声で言う。

少女は肩をすくめ、もう一度溜息をついた。

「おい、なんか鳴ってねえか？」

陽妖が光弾を放ちつつ言った。

「あ、俺だ。本部から交信。」

「J・J」が言う。ニューヨーク、旧国連本部ビルにある極光本部からの交信のようだ。

「しょうがないな、さっさとかたをつけるか。」

タムラさんの言葉を境に、斬撃と光弾で光政の部隊は全滅した。

「ふむ、まさかあのジョナサンが部隊など作っていいようとは
どうする?」

「遊撃、偵察、突撃というところでどうです?」

「簡潔だな。それでいい。」

この二人　・指令と副指令　には、それだけで十分だった。

「軍曹!　もう一度ハワードと交信。直接私につないで。」

「もう一文字も合っていないんですが　交信します。」

少女の前に画面が現れ、数秒後に「J」が現れた。

「Hi,YUI。」

「副指令を呼び捨てとはいいい度胸ねトーマス。」

「ジャックだ。名前ぐらい覚えろよ記憶容量すこいくせに。で?」

「カマクラに接近する敵を殲滅。敵の目的を解明。必要なら阻止。」

「相変わらず難しいこと簡単に言っねえ。一個目はやってっけどさ。」

「

「朗報を待ってるわ。」

「つれないなあひさしぶりなの。」

容赦なく通信を切った。

第八話：極光（後書き）

〓 次回予告 〓

次々とやってくる光政。そして、その中に魔術師が？
政が俺たちを倒そうとし始めた！！
いよいよ光
次回、第九話『朱雀』。

第九話：朱雀

通信を切られたＪ・Ｊは、ふとこちらに向き直ると、こんなことを言い出した。

「なあ、さっきの部隊、なんか変じゃなかったか？」

それは俺も感じた。

「統率が取れていなかったように思える。隊長らしい者もいなかったな。」

タムラさんが言った。

「つまり……」

「隊長のいない、別動隊だった。ということか。」

言いかけたタムラさんを遮って陽妖が言う。

「確証はないがな。そして、それが正しければ……」

本隊が間もなくやってくる、ということになる。

Ｊ・Ｊの魔法の一つに、『気配探知』というものがあつた。それによつて本隊が、あとわずかでここに着くことが分かつた。

それと同時にＪ・Ｊは、強い魔力を感じたと言つた。どうやら敵には魔術師がいるようだ。多少難しい戦いになってくるだろうと、俺達は覚悟を決めた。

そして、その部隊と遭遇した。これまでの部隊とは違い、腕に赤い布を巻いている。どうやら、前に鎌倉に『狩り』にきた部隊が誰か（俺達）に倒されたもんだから、少し強い部隊を送り込んだのだらう。ようだ。そして一般兵の一部を斥候として送り込んだのだらう。などと考えている間に、敵は左右に広がった陣形になり、その中心から真っ赤なマントと黒い皮の服をまとった褐色の肌の男が進み出てきた。

その男を見た瞬間、俺の背筋に冷たいものが走った。おそらく本能的に「Ｊ・Ｊ」の言う『魔力』を感じ取ったのだろう。隣のハルカちゃんも同じように感じたようだが、タムラさんと魔術師の陽妖は動じなかった。

「どうやら炎をあやつる魔術師のようだ。」

「Ｊ・Ｊ」が小さな声で言い、陽妖も小さくうなづく。

「そのとおり、我こそが光政の炎の魔術師、スザク・アフアブラムだ。名を名乗れ！」

なんとスザクと名乗った男は、「Ｊ・Ｊ」のささやき声とも言っていないような声を聞き取ったようだ。そして、「Ｊ・Ｊ」が答える。

「マナ使いジャック・ジョンソン。そして光の魔術師光陽妖、同じく中野ヒカル、剣士ヨシユキ・Ｐ・タムラ、癒し手ハルカだ。」

「Ｊ・Ｊ」のような魔術師をマナ使いと言うらしい。あとハルカちゃんも闇獣であることを言わなかったのは、「Ｊ・Ｊ」なりの考えだろう。「ほう、全員の名を言うのか。つまり全員で我に敵対すると言うことか！」

「我？ 俺たちが敵対してるのはあんただけじゃないぜ。お前ら『光政』全員だ！」

「Ｊ・Ｊ」に代わって陽妖が叫ぶ。

「そのつもりかもしれんが、お前らが敵対できるのは我一人だ。なぜなら……」

言つと同時に、スザクの頭上に火の玉が浮かぶ。

「ここで我に殺されるからだ！」

直径１メートルほどの火球が俺たちに向けて放たれた。

第九話：朱雀（後書き）

〓 次回予告 〓

やっぱり魔術師との戦い、簡単にはいかない。だが俺たちは負けるわけにはいかないんだ、影獣たちのために！
え？最初乗り気じゃなかったのは誰だって？ 知らないなあそんなこと！！

次回、第十話『炎の力』

第十話：炎の力

「これはオレにまかせろ！ 万能なるマナよ、我らを守る盾となれ！」

「J・J」が前に出て呪文を唱える。手にはさっきの戦闘では棍棒のようにつかっていた杖。俺たちの前から横に半球型の透明な盾ができて火球はそれにぶつかって広がり、俺たちの周囲を焼いた。つうか呪文も日本語なのな。

その炎が消えない間に、スザクは俺たちに接近していた。その手から、小さな火球が放たれた。今度は陽妖が光弾でそらす。

そして、俺がなんとか作った影の中で、タムラさんがスザクに斬り掛かる。

「ほう、影獣の剣士か。だが！」

スザクの炎が両刃の剣の形を取り、タムラさんの斬激を受け止める。二つの刃のあいだに火花が散る。…と、タムラさんが一瞬で後ろに回り、斬りつけた。炎がスザクを守るように包む。しかし、タムラさんの剣の方が速かった。鋭い刃がスザクの体を切り裂き、スザクはその場に倒れ伏す…かと、思われたのだが…タムラさんが切り裂いたのは、人の形をした炎だった。そしてその炎は一瞬で消えた。

一瞬の沈黙。そして…

俺たちのまわりでくすぶっていた、さっきの火球でついた火が激しく燃え上がり、…人のかたちになった。

「ははは、そんな攻撃で我を倒せると思ったか！」

どうやら奴は体を炎に変えて、別の炎のあるところから出てくる

ことができるらしい。なら…

「Ｊ・Ｊ！！」

「おうよ！！ 万能なるマナよ、この地に恵みの雨を！！」

とたんに雨が振り出し、辺りの火は消えた。

「ほう、なかなかのマナ使いだな。だが、この程度で私の能力を止められると…」

『止められるとも思ったのか』と言おうとしていたのだろうか、その言葉は出てこなかった。なぜか？

お忘れではないだろうか、今回ずっと沈黙していた戦士を。そう、陽妖の溜め込んだ力をすべてつぎ込んだ光弾が、スザクを撃った。

レールガン。おもわずそんな言葉が浮かんできた。陽妖の光弾の強力なエネルギーが、電気に変わったようにスパークしていた。同時に辺りが激しい光に包まれ、準備していた陽妖以外はみな目を覆う。数秒後、やっと目が元に戻った。 - といってもまだチカチカしてる。 - とき、俺たちが見たのは、斜めにクレーターのようになってたへこみと、大の字でボロボロになって倒れているスザク・アファラムだった。

「万能なるマナよ、この者をとらえる網となれ！」

Ｊ・Ｊの魔法でスザクは捕らえられた。

スザクが捕らえられた後の兵士は、やはり統率を欠いたが、それでも精鋭なようで、倒すのは少し苦勞させられた。

第十話：炎の力（後書き）

〃〃 次回予告 〃〃

やった！スザクを倒した！！…とおもいきやまた敵？しかもスザクより強い魔術師だつて！？…なんて定番な展開なんだ…？「フッフ、スザクは我ら四天王の中では最弱の…」

「黙ってる！！！」

次回、第十一話『光政の魔術師』

オレは戦う、みんなを守るために！！

第十一話：光政の魔術師

――東京 警視庁影獣特別対策課『光政』本部――

霞ヶ関の巨大なビルの一室とは思えないような、不気味な部屋の中で、巨大な画面を見つめている男が一人。その中には、赤いマントと皮の黒服を纏った男が強力な光弾に吹き飛ばされるところが映っていた。

「……………」

男は何も言わない。

「ほう、なかなかの能力者だな。配下に欲しいぜ。」
後ろに突然現れた男が言う。

「お前には無理だ、カルデロン。」

さらに二人、長身の男が現れ、言った。

「まあしかし、スザクがバカとはいえやつを倒すほどの能力者だ。何にしる手はうっておくべきだろう。」

長身の男が口を開く。この男がリーダーのようだ。

「セイ！ 行けるか？」

「はっ！」

いつのまにか扉のところに紺色の短髪の男がいた。

セイと呼ばれた男は長身の男と二言三言言葉を交わし、ふっと消えた。

俺たちはスザクを捕らえ、ようやく兵士も倒して一息ついているところだった。白い服をまとった男（さきほど水晶玉を見ていた男）が突然現れた。

「どうもはじめまして。私はライアー・T・スズキ。『光政』の魔術師だ。スザクが見苦しいところをお見せしたな。」

男が穏やかに言う。

「ほお、つまりお前が次に戦うてことか？　ならさっさと始めさせてもらうぜ！！」

陽妖が言い、光弾を放つ。……と、光弾は男の体をすり抜け、後ろの塀に当たった。ブロック塀が音を立てて崩れる。

「ふふ、ずいぶん血の気が多いね。でも、私の体はここにはない。今回はそのバカの回収と、新しい相手の紹介にきたんだ。セイ、自己紹介しろ。」

とたんに地面から水柱がたち、そこに紺色の短髪の男が現れた。

「光政の水の魔術師、『青竜』セイ・リーです。……お手柔らかに。」

第十一話：光政の魔術師 （後書き）

〓〓 次回予告〓〓

やれやれ、連中は伝説の聖獣の称号持つてゐたんだな。

何？ 手抜き？ なにをいうめちやくちや考え込んでゐるんだぞ。

この青龍野郎も実は……おっとこれ以上言っちゃいけないんだ。

次回、第十二話『青龍』。

サブタイトルの手抜きだと？ バレたか……

第十二話：青竜

「光政の水の魔術師、『青竜』セイ・リーです。……お手柔らかに。」

紺色の短髪の、キザな男はそう名乗った。顔は知的な雰囲気が漂う、それなりにモテそうな端正な顔立ち。言動から推測するになかなか知的で冷静な奴のようだ。服装は青いＴシャツにブルージーンズ、見事に青で統一している。これはちよつとなあ……

俺が何も言えずにいると、横でボソつとつぶやく声が聞こえた。

「セイ・リー……？ まさか………！」

つぶやいたのはタムラさんだった。普段はいつもクールであり感情を表に出さない人だが、その表情と声色はわずかに驚きを含んでいるように見えた。

「おやおや、あなたでしたか……ヨシユキ。」

何だ？ 知り合いなのかこの二人は。しかしセイがなんか怒っているように見えるのは俺だけか？

「なんだお前か。カナダ以来だから2年ぶりだな。ユイは元気か？
というか何でお前が光政にいるんだよ。」

おお、タムラさんが気さくだ！

「ユイはいない……」

「何？」

「お前のせいだよヨシユキ……お前がユイを、俺の大切なたった一人の妹を、殺したんだ……！」

ちよつとまでそりやどいうことなんだ？ 冷静だったセイはいきなりキレてるし、こいつの妹をタムラさんが殺したなんて……

「いや、おい、俺は何も……」

「うるさい……！」

「説明してくれ、どういうことだユイが死んだって……」

「てめえに説明しても無駄だよ……！！！」

完全に逆上している。そして、あたりに何本もの水柱が吹き上がった。

気が付くと、目の前に水の壁ができ、タムラさんとセイを囲っていた。

「何を言っても通じなさそうだな……」

タムラさんはため息を吐き、ゆっくりと、剣を抜いた。一瞬で鞘は消える。なんか異空間かどっかにしまってるらしいんだけど……って、あれ？ タムラさんの能力は影の中限定なんじゃ……と思って見た瞬間理解した。水の壁が上まで囲み、うつすらと影を作っていた。俺や陽妖の影は囲みの中には作れないようだ。そして、タムラさんの刀が、妖しく光った。

何十分経ったのだろう。何時間も経ったようにも、ほんの数分しか経ってないようにも思える。セイは水で竜や獣を出したり、不意打ちで水を噴き出したり、刃が届く一瞬前に体を水に変えたりしてタムラさんを翻弄している。一方のタムラさんは、知り合いということもあり、さらにはさっきの会話が影響しているのか、全力を出せないでいる感じだった。

一瞬、間が空く。二人は距離をとり、目で牽制しあっている……そして、タムラさんが一歩踏み出す。大上段から剣を振り下ろして、セイがよけた後に踏み込んで斜めに切り上げる。

「ふん、燕返しか。こんなものよけられないとでも……」

刃が届く寸前に体を水に変えて後退したセイの言葉は最後まででは出なかった。刃がそのまま縦横無尽に切り裂く。そしてバラバラになった水の間にあった小さな泡を、寸分違わず突き通した。そして同時に水の壁も少し形を保っていたセイが姿を変えた水も、すべて崩れ去った。

第十二話：青竜（後書き）

〓 次回予告 〓

十年前のカナダでの、少年達の思い出。それは非情な運命との戦いでもあった。

次回、第十三話『思い出』

第十三話：思い出

- - 2505年12月：カナダ・ムースニー - -

一面雪に包まれた辺境の小さな村。大きな家の前で、青い髪をした少年がひたすらドアを見つめていた。この家は中国系の大金持ち、タイロン・リー氏の邸宅で、少年は同級生で幼なじみであるその家の子供を待っているのだった。冬の夜にはマイナス三十度近くまで冷え込む地域。一見すると少女のようにも見える色白の少年は厚手のコートと手袋、マフラーを身にまとい、少し頬を赤らめてうつむきかげんに佇んでいた。

雪に音が吸い込まれているかのような静寂のなか、ドアが開く音がする。少年が顔を上げると、見慣れた幼なじみの顔があった。

「おはよ。ヨシユキ」

「ちよつと遅かったね。待ったよセイ、……ユイ。」

「おはよう。」

出てきた少年、待っていた少年、そして後ろから出てきた少女の順で挨拶を済ませる。出てきた二人はタイロン・リーの双子の子供、セイ・リーとユイ・リー。そして待っていたのはヨシユキ・P・タムラ。三人とも11歳。このときは三人とも、この後に何が待ち受けているかなど知る由もなかった。

「さ、行くうぜ。」

セイが言い出す。三人とも同じ時期に生まれたのだが、こういうときはセイが先頭に立つことが多い。

「ごめんねヨシ。いつも前で待たせちゃって。お父さんがあんなだから。」

前述のとおり双子の父親は大金持ちで、貧乏な日系人と先住民族の間に生まれ、早いうちに母をなくして貧乏な生活を強いられてい

たヨシユキを蔑視してできるだけセイ達と会わせないようにしていた。二人の母は同じく先住民族、しかもヨシユキの母の双子の姉で、理解もあつたのだが…… 数年前に亡くなっている。

「別に気にしてないよ。」

三人は微笑みあつて、一緒に小学校へと向かつて行つた。

「なあヨシ、聞いたかあの噂！」

帰り道を歩きながら、セイが興奮して言い出す。

「何？」

「ユーラシアの魔獣がこの村のそばにいるってやつだよ。」

「知らない。どうせデマだろ。」

「それが、そうともいえないみたいなの。」

ユイが口をはさむ。

「夜中に闇の中で人間でも動物でもない何かがいるって。見た人がいるのよ。それも何人も。」

「へえ……」

ヨシユキはあまり興味なさそうに前を向いて、歩みが凍り付いたように止まつた。

「ひさしぶりじゃの、ヨシユ」

道端に老婆が佇んでいて、ヨシユキに親しげに声をかけた。

「だからヨシユって言い方止めるよ、ばあちゃん」

「ユーラシアの魔獣、か。」

「なんかおかしいの？ばあさん。」

「いや、それだと元からユーラシアにいたような言い方だ、というだけさ。まあしょうがないがな。」

「え？ 元は他のところにいたの？」

「知らんじやろうな。もともとは南アメリカからきたのじゃ。」

老婆が語る内容は、幼いヨシユキにはとても信じられないような内容だった。

第十三話：思い出

(後書き)

〓 次回予告 〓

ヨシユキに祖母が明かす衝撃の事実、そして現れる魔獣。

一瞬で破壊された落ち着ける場所。

そしてヨシユキは決意する……

次回、第十四話『決意』

第十四話：決意

「魔獣が現れ初めたのは、2482年頃だと言われている……………」
南アメリカのジャングルから現れた魔獣たちは、あつという間に世界中に広がった。当然このムースニー周辺でも、魔獣と人間の戦いが繰り広げられた。結局ユーラシア東部が最初に征服されたので世界中からそこに集まったのだが……………」

「そして一つ重大なことがあるんじゃ。お前たち全員に関わることだ。」

自然に、体が前のめりになる。

「お前たちと私は血がつながっていない。お前たちの母親は、魔獣の一族なのだ。」

魔獣とはいえ、普段は人間と何ら違ってはいない。影や闇の中で人間離れた能力を発揮はするが、それでも能力の種類によつては全く見分けがつかないほどだと言う。

彼らの祖母が最初に彼らの母親たちにあつたとき、まだ二人は赤ん坊だつたと言う。彼女が暮らしているテントの前に毛布にくるまつて寝ていたそうだ。その横には魔獣の母親から、育ててほしいと書かれた手紙が置いてあつた。ところが二人はものすごい早さで成長していき、1986年頃にはもう子供も産める年になっていた。

そして一人は大富豪のリー氏と、もう一人は貧乏な日系人タムラ氏と結婚してそれぞれ子供を産んだ。それがヨシユキたち三人だ。しかし成長が早かつた分短命で、老けはしなかったがヨシユキの母は2490年、セイとユイの母は2495年に亡くなっている。

「お前たちはその傾向はないようだから、普通に生きられるだろうが……………」

劣勢の遺伝子だつたのか、病気だつたのかはわからないが、三人はそうなることはないようだ。

「そんな……そんな話、簡単に信じられるかよ！」

セイが叫んだ。

「なら、試してみるがよい。」

老婆は全く動じずに答える。

「今日日が暮れて真っ暗になってから、私のテントにきなさい。」

日が暮れて真っ暗になった後、三人はそれぞれ眠る振りをして寢室の窓から抜け出した。小さな明かりを持って祖母の住むテントへ。

「おお、来たか。」

祖母は笑顔で迎える。

「では、明かりを消せ。」

少し戸惑いつつも、三人は明かりを消す。何も見えない、真っ暗闇が訪れる。

「ふむ、姿は変わらないようじゃな。はつきり言つて、私はお前たちの能力がどんなものかも、どうやって見つけるかも知らん。だが、自分で探せば、その能力はきっと見つかるはずなんじゃ。目を閉じて、自分の中にある力の流れを感じてみい。」

三人は目を閉じ、数十分が経つ。最初に能力が現れたのはユイだった。突然何もなかったところに様々なものが現れる。子供用のイス、ソリ、はたまた双子の家にあるのと同じシャンデリア。どれも光っている訳ではなかった。しかし、暗闇でもそこにいる誰もがそれが何でどんな形、色をしているのかわかり、そしてそれは存在し続けた。翌朝になっても、何週間経つても。

次に能力が現れたのはセイだった。突然足下の氷が溶けて水になり、宙を舞う。少し経つと思うような形に動かせるようになった。

しかし、ヨシユキはずっと能力が現れなかった。

「ふむ……少しタイプが違うのかもしれないヨシユは。まあもうだいぶ遅い。これから家に帰れ。」

祖母の言葉で、三人は明かりをつけてそれぞれの寢室に帰っていた。

それから、ヨシユキは少し双子に対してコンプレックスを抱くようになった。セイは闇でなくても少し水を操れるようになり、ユイは少しずつ思ったものを出せるようになっていた。といってもユイが出せるのは思い出に残っていて現在は存在しないものだけだということがわかってきた。

ある日、ヨシユキは気づいた。木や家の影では、素早く動いているものや遠くが非常によく見えるということに。そして影の中で、自らの中の力の流れを探してみた。すると、影の中では身体能力が上がったり、魔法のような技が使えるようになっていった。

もう、コンプレックスは消えていた。そして三人とも、少しずつ能力が成長していった。

ある日の夜、街が魔獣に襲われた。村の大人が必死になって戦い追い返したが、その過程で死傷者が多数出た。病院にいらんだ近所の大人たちの遺体…… 優しかった大人たちの変わり果てた姿に、ヨシユキは下唇を噛み締める。

「ばあちゃん、俺、強くなるよ。もう周りで人が死なないように。」
数ヶ月前に亡くなっていた祖母に誓ったのだった。

それからのヨシユキの努力は血のにじむようなものだった。必死で身体能力と魔獣から受け継いだ能力を磨き、父に剣道の心得があると聞いて学び、自分に最もあった剣術を完成させていった。

そして2500年、ヨシユキは父が先祖から受け継いだという長刀を持ち、列車ではるか遠く、メキシコに向かった。ちょうどそこで影獣のグループと光政の戦いがあったのだ。

そしてここからはヨシユキの知らなかった話。その半年後に、ユイもメキシコへ、飛行機で向かった。ヨシユキを助けるために。そして、ヨシユキに会いたいという気持ちのために。しかし、セイの

もとに耳を疑うようなニュースが飛び込んできた。ユイの乗っていた飛行機が、影獣によって墜落させられたと言っただ。セイは悲嘆にくれた。そしていつの間にか、ヨシユキを恨むようになっていたのだ。

第十四話：決意 （後書き）

〓 次回予告 〓

セイの記憶が流れ込んだタムラさんは後悔する。

悲しむタムラさんの前に現れたのは……

ところでこの話の主人公って誰だっけ？

次回、第十五話『ユイ』

第十五話：ユイ

「セイの芯である泡を突いたとき、セイの記憶が流れ込んできたんだ。」

タムラさんは言った。

「しかし、ユイが死んでしまっていたなんて……くそっ、あいつには帰ってから言いたいことがたくさんあったのに……」

タムラさんは悔しそうに地面を拳骨で殴った。

「……あら、何かしら、言いたいことって。」

背後の森から声が聞こえ、十八歳くらいに見える少女がゆっくりと出てきた。

「ま、まさか……ユイ？」

タムラさんが驚いている。珍しい。……らしいのだが、最近タムラさんは驚いてばかりなのであまり珍しいとは思えない。というかタムラさん途中から出てきたのにもう主役みたいになつてるよ語つてる俺の立場は何なんだワトソン君か？ ……………失礼、かみもとい取り乱しました。

「あれ、副司令サマでねーの。」

「・」は平然と言う。

「やあヨシユキ。驚いた？　　というか何よハリーその嫌みっぽい言い方。」

え？ まさか……

「えーつつつつつ！？」

俺と陽妖とハルカちゃんが叫ぶ。

「あら、分からなかったかしら？ ハワードが私のことYUIって呼んでたでしょ？」

「いやー、俺も忘れてたよ、なんでユイ・リーって名前出たところで気づかなかつたんだろ。H A H A H A H A H A H A ! ! !」

「Ｊ・Ｊがフランクに言う。そして、タムラさんは気を失っていた。

ユイが乗っていた飛行機が着陸する寸前、影獣グループの攻撃でエンジン三基のうち二基が破壊、翼にも穴が空き、飛行機は真つ逆さまに墜落していった。その時だった。ユイの隣に座っていた男性客が立ち上がり、あたりが突然黒い渦に包まれた。そして気がつくとユイとその男、そして周りにいた乗客数人はニューヨークの裏路地にいた。その男が後の極光の創設者であり総司令官、ヨハン・Ｇ・グラッドマンで、その乗客たちが作った組織が極光だった。彼らは有力な戦士を募り、旧国連本部ビルに本拠を構えて戦い始めた。そしてその極光にスカウトされて加入した「Ｊ・Ｊ」が、戦場でタムラさんと出会ったのだった。……と、タムラさんが意識を取り戻してからのユイさんの話をまとめるとこんなところだ。

「えっと、でセイは？」

「いや、それが……………」

隠してもしょうがない、これまであったことを話した。

「そう。じゃあその光の魔術師。」

「え？ 俺のこと？」

陽妖が声をかけられた。

「闇を作って。私の周りに、大きめの方がいいわ。」

「あいよ。」

すぐに、ユイの周りに闇ができる。そして、闇で見えないはずなのにユイさんが何か必死にイメージしようとしているのが分かった。そして、何分経っただろうか。その傍らにぼんやりとした影ができ、それがだんだん実体化していった。陽妖が合図を受けて闇を消したときには、そこには１２歳ぐらいの少年がいた。

「……………セイ。」

横にいたタムラさんがつぶやく。まさか、セイ・リーの少年時代の思い出から、実体化させたってのか？ 闇獣の能力の凄まじさを、

俺は改めて実感した。

「Where . . . , where is here? Who are you?」

少年が言った。そうかカナダに住んでたんだよな。つまり回想シンは実際は英語で会話が行われていたということになる。J・Jとユイさんの通信は日本語だったがそれがなぜかなど俺は知らない。現在の言語事情もあまり知らんしな。

ユイさんが少年に話しかけている。十二歳の少年ともなるとだいぶ背丈もあり、十八歳くらいなはずのユイさんより少し小さいくらいで目線もほとんど変わらない。というかどんな説明をすれば納得するのだろうか。

「OK , I see .」

いったい何が分かったのだろうか。会話の内容は残念ながら俺は日本生まれの日本育ちでありジャパニーズイングリッシュは600年ほど前から変わっていないのでちっとも聞き取れなかった。あとで機会があれば聞いてみよう。

「ところでヨシユキ。」

ユイさんがすごく真面目な顔でタムラさんに話しかけた。

「な、なんだ?」

タムラさんが突然話しかけられたのとユイさんの表情に驚きつつ返事をする、突然ユイさんはニヤリと笑い、言った。

「帰ってから言いたかったことって、なに?」

第十五話：ユイ （後書き）

〓 次回予告 〓

「ふむ、いつのまにか三年目か。しかし十五話……」

「しょうがないでしょヨシユキ、作者は本業小説家じゃないんだし。」

「うう、ついに予告まで獲られた………」

「まあそう落ち込むな。後半はお前の見せ場だぞヒカル。」

「えっ!？」

「まだまだ先だがな。敵がもっと強くなってからだ。」

次回、第十六話『白虎』

第十六話・白虎
(前書き)

お久しぶりです。

第十六話：白虎

ユイさんはタムラさんをさんざんからかったあとに少年セイを連れて帰っていった。副司令が長く本部を離れるわけにいかないようだ。というか何をしに来たんだろうか。

ところで、最初に出てきたのが『朱雀』次が『青龍』……ということは、次に出てくるのは白虎か玄武か。しかしわかりやすいな。それ以前に次々と現れる敵を倒していくって定番過ぎる気がするなあ。といつてもまあやってくるんだからしょうがない。交代で警戒しつつ、いつのまにか一晩が過ぎていた。その日の午後だった。

向こうから歩いてくる一人の男が見えた。兵士は連れていないようだ。無駄だと考えたのかな。一応光政の兵士は最先端技術を駆使した武器を持ち、かなり強いはずなのだが、逆にその武器に頼りすぎて兵士の能力はどんどん落ちていくようだ。したがって俺たちには到底太刀打ちできない。武器がよくてもまったく使えてないからな。それでなぜ影獣狩りができたのかといえば、影獣の能力を封じることのできる武器を連中が持っていたからだ。だが影獣以外には効かずタムラさんは能力が封じられていても強いので意味がないというわけだ。

……なんてことを思っていたら。突然、雷が水平に走った。
「なっ……！？」

爆音と閃光、一瞬で焦げる俺たちのすぐ後ろの木。

「今のは警告だ。命中させるのは簡単だぜ。今すぐ投降すりゃあ許してやる。」

男が言った。金髪を逆立たせてセットしていて、耳にはいくつものピアス。不良的な格好で、右手に鉄パイプを引きずるように持っている。さっきこの鉄パイプから電撃がでてるように見えた。

「はいよ。」

……Ｊ・Ｊの奴、即答しやがった。もう両手を頭の後ろで組んでやる。どういふことだ？

「まったく、決めるのが早すぎだアホ。」

と言いつつタムラさんも手を組んでしまった。この二人抜きで戦える気がしないし、Ｊ・Ｊにも何か考えがあるんだろっから俺たちも習う。

「おお、早えな。ハハツ、あいつらがやられたつつうからどんなもんかと期待してたが、ぜんぜん骨がねえじゃねえか。」

男が俺たちを嘲笑して言う。耐える俺、耐えるんだ俺！！

と、男はおもむろに携帯電話を取り出し、どこかに電話をかけ始めた。

「あ、もしもしスズキさん？ビヤツコですけど」

……やはり白虎だったか。雷だからな。

「ふむ。聞こえてるか？」

突然、Ｊ・Ｊの声がした。思わずＪ・Ｊを睨むように見てしまった。『ヒカル目怖い。みんな、聞こえてるなら一瞬こっち見てくれ。絶対に声は出すなよ。』

どうやらテレパシー的な魔術らしい。みんなが一瞬Ｊ・Ｊに視線を送ったのがわかった。

『よし。いいかよく聞け。あいつは今油断している。倒す絶好のチャンスだ。だが、あいつの電撃は脅威だ。食らったら黒こげになるだから、作戦がある。』

みんな、一字一句聞き漏らさないように集中しているのがわかる。

『陽妖の能力は光を操るだろ？』

陽妖が小さくうなずく。

『ヒカルも使えるよな？』

さりげなくうなずいた。

『光の色はコントロールできるか？』

陽妖はうなずき、俺は首を振った。

『そうか。じゃあ陽妖、あいつに気づかれないように小さく赤い光

を出してくれ。』

陽妖の右足が赤く光った。

『じゃあ、それをもっと赤くしてくれ。』

え？ 一瞬陽妖もとまどったような目をした。 と思ったら突然光の色が変わり、消えた。

『できたか？』

陽妖が頷く。 タムラさんもハルカちゃんもわかっているような顔をしているからわかってないのは俺だけのようだ。

『じゃあ、思い切りさげて出してくれ。』

陽妖は頷いて、何かを始めた。 なにをやっているかはわからない。 もうちょつと離して見る。』

……その瞬間。 ビヤッコが突然顔をしかめて電話を耳から離れた。

『よし、もつと出力をあげてくれ。』

ビヤッコが苦しみだした。

『よし、』

『いくぞー！』

Ｊ・Ｊが叫び、ビヤッコがこちらを向く。

ビヤッコはまた電撃を放つ体勢になった。 ひるむ俺、つつこんでいくタムラさん。 ビヤッコが電撃をとばそうとするとその電気が分散して地面に流れていった。

『ヒカル！ 光弾をー！』

タムラさんが叫びながら突っ込む。 そのわき腹をかすめるようにして、思い切り光弾を放った。

「いやー我ながらよく考えたなー電波で妨害するとか。」

Ｊ・Ｊが頭をかく。

電波は光の一種で赤外線よりも周波数が低いものだから陽妖の能力の応用で出せるらしい。 で、携帯の電波を妨害し、電気使いのビヤッコの能力すら妨害したというわけだ。

「……俺たちの力って、計り知れないんだな。」

言いながら、ぐっと拳を握り締めた。

第十六話：白虎（後書き）

〓 〓 次回予告 〓 〓

「世界にはまだまだ俺の知らないことがたくさんある!!」
「いや、電波が光の一種だってくらい知っておきなよ。」
「じゃあハルカちゃん俺が実はサイボーグだって知ってた？」
「え!?! 知ってるわけないじゃん。そうだったの!?!」
「ウソだよ……」

次回、第十七話『幻想』。

「幻想を殺せる人が出てくるよ!」
「そういうウソをつくなよ。」
「いいぜ、まずはそのげっ……どわああああ!」

第十七話：幻想（前書き）

だいぶ空いてしまいました。

ちなみに前回の予告書いた時点でこの話は前半半分しかできてなく、
ネタのアイディアも作ってませんでした。

後半を書いたのはそれを完全に忘れた五月八日です。母の日？ な
にそ（ry

書きあがってから前話を手直しして予告見て驚愕しました。

第十七話：幻想

- 光政本部 -

暗い部屋の中、白に近い灰色のローブを着た若い男が立っている。

男の前に巨大な画面があるようで、青い光が男の顔を照らしていた。

「幻想、私を狂わせる甘美な魔法。それが力、力こそが正義……」
ふつ。と、男の後ろに別の男が現れた。

「パライくん、相変わらず厨二な独り言だねえ。」

後ろにあらわれた男はあの、ライアー・Ｔ・スズキだった。

「なんですかそれは、スズキさん。というかゲンブで結構です、いや玄武と役職で呼んでください、大鵬さん。……で、何の用ですか。」

「いやあ、君の出番なのでね。黄竜がいない今、君が五獣隊の最後の砦なんだから。」

「任せてください。俺を誰だと思ってるんですか！」

「そういう過信が前の三人の敗因の一つだとは思わないのかい。」

「過信ではなく自身であり、事実です。」

「……そうかい。なら、……行つてこい。」

なかなか敵は現れず、結局「」の提案でそのまま光政の本部に進むことになった。

「まあ、次が玄武であることは確実だろう。」

タムラさんがぼつりと言う。

「その後は……麒麟かな？ たしか朱雀・青竜・白虎・玄武それぞれ南・東・西・北で中央にボスの麒麟が……」

それを聞いて陽妖もしゃべり出す。そういえばこいつ中国人だった。でもボスってなんだおい。

「もともとは黄竜だ。途中で麒麟と同一視されたり、置き換えられたりしたかな。」

タムラさんの鋭いツツコミが入った。俺はふつうの日本人だし知ら

なかったが、おい陽妖。

「えーっと、タムラさんカナダ育ちなのになんでそんなに詳しいんですか？ 中国の伝説ですよね。陽妖は逆に中国人なのにぜんぜん知らないし。」

「俺は闇獣の家の床下育ちだぜ。」

「セイたちの家は中国系だ。」

「……なるほど。」

こんな会話を続けていると、向こうに東京のビル群が見えてきた。そうそう、忘れられてそうだが、俺たちは歩きではなくセグ。エイで移動している。意外と速いんだよこれが。

…と、そのビル群が少しぼやけたかと思うと、突然ぐにやりと歪んで、消えてしまった。

「な、なんだ？」

おもわず叫ぶ。

「蜃気楼の消え方のようなが…さっきまでは確かに実体があったぞ。」

タムラさんは冷静。場数踏んでるだけあるなあ。

「いや、YOSHIIYUKIはこうみえてだいぶ動揺してるんだぜ。」

ああ、そういえば「J」のタムラさんの呼び方こんな設定あったわけ。

「おい設定とか言うな。」

だからなぜモノログと会話してるんだ。

「お前ら、漫才やってる場合じゃないみたいだぞ。…お出ました。」

…遙か前方、といってもぐんぐんこちらが近づいていっているが、俺たちの進んでいる先に人影が見える。道の真ん中に仁王立ちしているそいつの姿が近づいて来たと思うと、そのまま大きくなり、見上げるほどになってきた。

「おいおい、なんだあのGIANTは？」

…お前が言うとは危機感がないが、だいぶ手強そうだぞ。どうやら、

『幻想』の魔術師のようだな。」

えーっと、それってつまり…

「俺たちに幻をみせる能力ってことさー。その強さによっちゃ厄介だぜ。」

おお、陽妖が賢く見えるが、気のせいかな？

「気のせいじゃねえよ！」

「お前らはなんでそういう時も空気を読まずに漫才を始めるんだ…」

「じゃあないっし…うわあっ？」

言いかけた陽妖が驚いたような声をもらす。見ると、セグウェ。ごと陽妖が浮き上がっている。

「な、なんだ？」

気がつくのと、辺りが薄い霧に包まれている。

「いいぜ、まずはそのげっ…どわあああ！」

セリフが遮らなきやいけない感じだったからじゃないだろうが、」
」も吹き飛ばされた。

「ちくしょう、どうしろってんだ！」

「ハルカ、術の範囲外に出ておけ。」

「はい。」

冷静なタムラさんの指示で、ハルカちゃんはUターンして一度元来た方へ戻っていく。

「タムラさん、どうするんですかあんな巨人。」

今この場には、浮かんでる陽妖を除いて俺とタムラさんしかいない。敵は一人とはいえ巨人。勝ち目はあるのだろうか。

「ふん、この程度。よし、奴の化けの皮を剥がすぞ！」

タムラさんは言うなり急に加速して、敵の巨人（おそらくは玄武）に突っ込んでいった。

ちなみに吹き飛ばされた」・」はどうだか知らないがみんないまだに。グウェイに乗っている。そしてセグウ。イの全速力で突っ込んでいくタムラさんに、巨人の右腕が降り下ろされる。

「危ない！」

「巨人に苦痛のおくつ……うわああああ！」

俺の叫び声と同時に「・」が何かまた遮らないといけないようなことを叫びながら吹っ飛んでいった。共通点魔術師ってことと外人ってことだけ…意外とあんじゃん。

…おっと、そんな場合じゃない。巨人の巨大な拳は確実にタムラさんの頭上に降り下ろされている。

「ふん、幻想だ！」

タムラさんが叫ぶ。その瞬間。その拳が嘘のように消え去る。

「なっ……」

なにも言えないでいるうちに。

「ドナルド、陽妖、いつまで寝ぼけてるんだ！ ヒカル、お前もだ、それはただの幻想だ！」

「人をマ。ドのキャラクターみたく言うな！」

「・」が珍しく呼ばれ方にツツコミを入れた。…ってあれ？ 吹き飛ばされたはずなのに横にいる。陽妖もさっきまで浮かんでたのに横で普通にセグウェ。に乗っている。

「ど、どうなってるんだ？」

そろって驚いているうちに、タムラさんはさらにスピードを上げて突っ込んでいく。

「はああああああ！」

そのまま、巨人の足元の何かを真つ二つに切り裂いた。そして、霧も巨人も、全て消えた。

第十七話：幻想（後書き）

〓 次回予告 〓

「……」

「どうしたヒカル、俺に主役をとられて悔しいのか？」

「それもありますけど…これ、野球チームと戦ってるみたいじゃないですか？」

「とられたことは認めるんだな。」

「あの、話聞いてください。なんかキャラが崩れてますよ。」

「ちなみに俺はそのチーム嫌いだ。主にフロントがな。西村は好きだが。」

「ちなみに作者もまったく同じです。」

次回、第十八話『塔』

第十八話：塔

しばらくたって、ゆっくりとタムラさんが戻ってきた。後ろからは霧が晴れたのを見てとったハルカちゃんも戻ってくる。

「やれやれ、毎度毎度やつかいなもんだな。」

「…というか今回、タムラさん以外何もしてませんよね。」

「いきなり飛ばされたんだからしゃあねえだろー。」

いや、「J・J」は遮らなきゃいけないようなネタ言ってたのも原因じゃないか？

「あれはまあその場のノリでな。」

「だからモノローグと会話するな！」

「しかし、意外と骨なかつたな。」

「…陽妖、なにもしてないじゃん。」

「ハルもだろー？」

「…わたしはもともとバックアップだし。」

そう、俺たちの心の回復のために…肉体的回復は闇に入らないとできないから。

「とりあえずだ。」

タムラさんが口々に喋っているみんなを静める。ホント主人公だな…

「次に来るのが黄竜なのか何なのか分からんが、おそらくさらに強いはずだ。」

…そうだ。これまで、敵はだんだん強くなっていった。

どんどん、一筋縄ではいなくなってくるだろう。

たとえばあのスズキという男。だいぶ上層にいるようだが、きっと立ちふさがってくるだろう。

しかもこれからは光政の本部に乗り込むんだ。

勝手の分からない場所で、戦いも不利になる。

これまでに以上に危険で辛い状況になるだろう。

…でも。

「やるしかない。」

「ここまできて、やめるわけにやいかねえよな。」

「そろそろオレの本気を出すときさ。」

「…そうだね。」

みんな。影獣の人たち。村長や、魚屋のおっさん、俺の家の隣の若い夫婦、近所の子供、俺たちのまわりのたくさんの人たち。

「守らなきゃ、な。」

「ああ。いくぞ、敵の本拠に乗り込む！」

タムラさんが言う。そして、全員全速力でセグ。エイを走らせた。

- - 光政本部 - -

暗い部屋の中。

モニターを見つめる影があった。

「やれやれ、まさかこんなところまで攻め込まれるとはね。前代未聞だねえ、カルデロン？」

「前例があつたらこの組織はつぶれている。しかし、やけに楽しそうだなスズキ。」

「やつと僕の出番だからね。マニュアルだかなんだか知らないけど、上は頭が固いねえまったく。」

「やむをえんだろ。取るに足らない反乱にいちいち幹部が出向くわけにはいかん。もつとも…」

「今回は取るに足らない相手ではなかった、ね。」

「一気に出向いて油断して全滅しないためでもあるんだ。実際デー

タは集まっただろう？」

「五獣は全滅したけど、ね。」

一瞬スズキの顔が暗くなる。

「…五獣隊ということで言えば、黄竜がまだいるだろ。」

「黄、ねえ…… ずっといないじゃないか。何やってんだか。」

「知るか。まあいい、とりあえず、俺たちも準備しておくぞ。」

「四段体勢か。黄のところはどうするんだい？」

「お前が最初に行け。黄竜のところは開けておこつ。」

「……まったく。」

「ぜんぶ片付けてしまつて構わんど。まあ、やつらがここまで来れたらだな。」

「来れるだろうさ。……わかつてるだろ？」

「まあな。」

「……まったく！」

「やれやれ、まだいるのか……」

陽妖やタムラさん、みんな口々にぼやく。

やはり本拠地のすぐ近くだ。光政の隊員がうじゃうじゃいる。しかも向こうのホームグラウンドだから、それを活かしていくつかの部隊で連携して攻撃してくるのだ。……正直、キツイ。

その大軍をひたすら蹴散らして、何分経つたろうか。ようやくあたりが静かになった。くる敵をかたっぱしから倒し、ついに全員を倒したのだ。そして。

「ここ、だな……」

タムラさんが静かに言う。

……そう、ちょうど最後の部隊を倒したとき。俺たちは、光政の本部ビル、まさにその前に立っていた。

「……塔。」

ハルカちゃんがつぶやく、まさにその通り。

光政の幹部たちがいる、奴らのコンクリートの城は、それこそ勇者達を待ち構える魔王の住まう塔のごとく、近代的な建物の中に怪しくそびえ立っていた。

第十八話：塔（後書き）

〓 次回予告 〓

「そういえば、ヒカル。お前十五歳って学校はどうしてるんだ？」

「あー、その話はそのうち出てきます。…もしかしたら、無理やり以前話していたことになるかもしれませんが。」

「どういうことだ？」

「割り込み投稿ってシステムがあって…って、次回の話しましょう
とりあえず。」

「ああ、これを読めばいいのか？」

「身も蓋もないことを…そうですね。」

「えーっと…『今回は奴が出てくるそうだし…って俺の見せ場はない
のか。』」

「なぜそんな棒読み…まあこれまでタムラさん目立ちすぎてました
からね俺主人公なのに。」

「あれ、変わったんじゃないのか？」

「設定的に…」

「まあいい、長くなりすぎだ。予告しよう。」

「…こっちの台詞ですよ。」

次回、第十九話『壁』

第十九話：壁

「…暗いな。」

タムラさんがつぶやく。別に作者の性格とかそんな話ではない。俺達が入ってきたこのビル、光政の本拠地。だが、隊員がみな俺達を迎撃しに出てきたからか、誰もいないうえに暗い。といっても照明が点いていないだけだから真っ暗ではないが。

「しかし、どこ行ったんだ？ 光政の連中。」

あいかわらずＪ・Ｊの調子は軽くて緊張感がないが、実際今いるフロアには誰もいる気配がなく、かといってもぬけの殻というわけでもないだろうから、どこかで待ち伏せされている可能性が高い。…のだが。見るとＪ・Ｊは、そんなことを微塵も考えていないようにスタスタと歩いていく。

「タムラさん、こいつ、極光のエリートじゃなかったっけ。」

陽妖が呆れた顔で言う。みんな考えは同じなようだ。

「仕方がないだろ、Ｊ・Ｊなんだから。」

「え？」

タムラさんの言葉にＪ・Ｊが妙な声をあげる。

「そだな。」

「そっか。」

「そうですね。」

「おい！ 何が言いてえんだ！」

「別に、言っただまのことだ。」

「そつだぜ。」

「だよ。」

「そつそつ。」

「お前ら、行数稼ぎするな！」

「何を言っている、行数稼ぎなどしていないぞ。」

「そつ…」

「もうええわ!」

「落ち着け」・「、関西弁になつちよる。」

「タムラさ、そゆおめさんも…あれ?」

「どうやら、敵の術中のようじゃな。」

「k t k r」

やれやれ…つて、え? なんかいま変なの混ざってた。

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:」

なん…だと? H L西ちゃんがスラング全開で喋っている。

「なあ」・「、ネットスラングというのは方言に入っちゃよるのか?」

「知らんがな。」

「私の趣味だ。」

真上から声が降ってきた。そうそう、モノローグは面倒なので共通語でやる。

「てめえか、これ仕掛けたんは?」

「」・「が見上げて叫ぶ。似合ってるなあ関西弁。

「ははは、愉快だろう?」

「ふざけんな、降りてこい!」

「嫌なら、自分で壊してみろ。」

「そげぶw」

うん、こんなハルカちゃんは嫌だ。

「やれやれ、どうせ、幻想だろ?」

おお、タムラさんが共通語に戻っている。…てことは。

「まったく、なんなの?」

「…え?」

文字ではわからないから解説すると、今喋ったのはハルカちゃん、口調もいつも通りだ。だが。聞こえてきた声は…タムラさんのものだった。そして、それに反応した俺の言葉はハルカちゃんの声だった。

「おいおい、声優チェンジ?」

「」・「は俺の声。」

「声優など入っていない。」

タムラさんは陽妖の声。つまり…

「わけわかんねえな。」

陽妖が「Ｊ」の声になっていた。

「てめえ、もとに戻せ！」

「Ｊ」が俺の声で叫ぶ。

「無理な相談だな。私の役割は第一の壁。君たちをやすやすと通すわけにはいかないのだ。」

言いながら、男は宙に浮かせていた体を俺達の目の前にふわりと降り立った。

「お前は…たしか、ライアー・Ｔ・スズキといったか。」

タムラさんが陽妖の声で言う。

「その通りだ。覚えててくれて嬉しいよ、ヨシユキ・Ｐ・タムラ。」

スズキが言った瞬間。俺の背筋に鳥肌がたった。すさまじい殺気。そしてタムラさんもそんな殺気を放つ。

「ところでさ。」

ふつ、と、突然スズキが殺気を放つのをやめてだらりと力を抜いた。

「忘れてたんだけど、君たちに紹介しなきゃいけない人がいるんだ。」

まるで入念に示し合わせていたかのように、薄暗い廊下の向こうに人影が現れた。同時に、また走る鳥肌。

「おいおい、冗談だろ…？」

「Ｊ」の声で陽妖がつぶやく。なぜか、ひどく震えていて、その目は現実から逃れようとするかのように虚ろになっている。

「陽妖…？」

思わず呼び掛けるが、声がハルカちゃんの声だからなんか妙な感じだ。

「この魔力、俺のと似すぎている…こんな魔力を俺以外で持つてる

としたら、俺の母、光陽蘭だけだ！」

第十九話：壁（後書き）

〓 次回予告 〓

「ううむ、声が違うというのは気持ちの悪いもんだな。」

「だんだんなれて、たまにはいいなとか思えてきました俺は。」

「…自分で自分に愛を囁いて悶えたりしてないだろうな。」

「なっとななななそそそんなこと…」

「凶星か。ただでさえお前がハルカの声ってのが気持ち悪いのに。」

「タムラさん、最近どんどん性格悪くなってません…?」

次回、第二十話『新手』

第二十話：新手（前書き）

だいぶ空いてしまいましたが二十話です。

第二十話：新手

影はゆつくりとこちらに近づいてくる。陽妖の感覚が正しければ陽妖の母、光の魔法戦士光陽蘭ということになる。ちなみになぜ母の方だとか名前とか分かったのかというとハルカちゃんの親が戦ったときに今の陽妖とよく似た魔力を持っていると感じたからと、その時名乗り合ったからだという。その話は以前聞いていた。

「さあ、楽しい時間になりそうだねえ。」

スズキが不敵にニヤリと笑って言う。うざいなこいつ。…なんて思ってる場合ではなかった。気がつくと思はふっと消え、いつの間にかハルカちゃんの後ろにいる。

「ハルカ！」

タムラさんが陽妖の声で叫ぶと同時に影が光弾を放つ。ずっと影のままなのは能力だろうか。…とと思っている間にタムラさんが剣の背でハルカちゃんを思い切り上に投げ上げていた。標的が上に飛んだ光弾はそのままその先にいた俺に向かって飛んでくる。

「げっ…」

いやー、声が自分のじゃないってのは厄介なもんだな。言った気がしない。俺は向かってくる光弾の少し上を狙って光弾を放つ。向かってきたほうは下に反れて床にぶつかり、俺が撃った方はそのまま上に反れて飛んでいく。

「…発動！」

光弾が影の真上に来たところで、久しぶりのフレーズを叫ぶ。独特の浮遊感とともに影の真上に瞬間移動した。

「…いくぞ。」

見事な着地をするハルカちゃんを横目で見つつ、全力の光弾をありったけ打ち込む。爆発。爆風と閃光で、一瞬の間その場にいた全員が何も見えなくなった。

何度もまばたきをしつつ、空中で光弾を放って少しずれたところに着地する。さすがに影の頭の上に着地は出来ないよな。うすいもやと光の残像が晴れたとき…そこには、何もなかった。

「…え？」

俺たち全員が度肝を抜かれる。光弾の威力は強くはあるが、人を消し去るほどはない。だが目の前にはさっきまでいた影は跡形もなく、床に少し、強い光によって出来た、光の当たらなかったところの跡が残っているだけだ。それはそこに何かがいたことは示している。とても薄い影で、希薄なものではあるが。しかしそこには何もいない。陽妖や「J」も反応していないということは魔力も消え失せているということになるだろうか。…どういうことだ。

「はーっはっはっはっは！こりゃあ愉快なものを見た。」

俺たちが驚いていると、突然スズキが笑い出した。

「いやあ、まさか消し去ってくれるとはねえ。計算外だよ、ここまでやってくれるとは。まああつさりやられてはくれないだろうと思っただけどさ、せいぜい足掻くのを上から見られるかなーと思っただけだ……」

突然、背筋に寒気が走った。

「しょうがないなあ、少し本気を出そうか。」

さっきのとは比べ物にならない強い殺気。全身の血液が凍りつくような感覚に襲われた。

「まさか、あの程度で俺の本気だったなんて、思っただけだね？」

これからが…本番だ。」

一人称が変わっている。何かのスイッチを押してしまったのだろうか。しかし光政の連中はやたらと、弱い方から出てきたり悪役としては丁度いいんだろうけどあざとすぎる感があるな。なにか狙っているのだろうか。

「さあ、祭りの始まりだよ。」

第二十話：新手（後書き）

〃〃次回予告〃〃

「いやー、もうすっかり夏ですよー。」

「作中で全く季節の描写ないんだから身も蓋もないこと言っな。」

「作者は夏祭りとか女の子の浴衣が大好きらしいです…」

「話をそらすな。」

次回、第二十一話『祭り』

「サブタイトルだけ見ると日常パートみたいだな。」

第二十一話：祭り

気がつくと、祭りは始まっていた。そんなにでかいものではない、町内会のちよつとした夏祭りのような感じ。なんとなく、懐かしい感じがした。

辺りを見渡すと、たいして広くない広場に人がうごめき、そんなに多くの人数がいるわけでもないのだろうがだいぶ込み合っていた。それを包囲するかのように模擬店のテントが立ち並び、舞台のようなものも見える。

……え？

スズキは確かに『祭りの始まり』と言った。だが…… これはなんだ？ わけがわからないよ。マジで祭りかよ！ 何を考えてるんだあいつは。趣味？ …… 浴衣姿の女の子を眺めるのは俺としても構わないんだけどさ。でもそんな緊張感のないことをしてる場合でもないだろう。とりあえず、みんなを探そう。

全員見つかるまでにはけっこうな時間がかかった。なにしろこの人口密度だ、祭りではぐれたことのある人はよくわかると思う。混んできたりすると、知り合いがいても一度も合わずに翌日お互いに行っていたことを知って一緒に回れなかったのを残念がったりするし。まあ「Ｊ」とかタムラさんは目立つけど、それでも大変なんだよ。スタンドの大観衆の中から特定の誰かだけ見つけられるどこかの球児はほんとにすごいと実感するね。

そして、全員集まったところで広場の端の縁石に座って相談を始めた。

「とりあえず、あいつを見つけないことにはどうにもならんな。」

「それが簡単にできるかどうかだろ？」

「というか、何なんだここは！？」

順にタムラさん、」「、陽妖。

「そういえば、声が戻ってる。」

……なぜか浴衣姿になってるハルカちゃん。なんで？ あいつの趣味？

「ハルカ、なんでお前だけ浴衣なんだ。」

「知らない。なぜか。あの人の趣味かな…？」

……皆さん考えてること同じで。

「……………」

「どうした」「、無い頭働かせようとしてるような顔して。」

「いやさ、……………」

さりげない毒舌はスルーか。

「なんだ？」

「つまり、奴には俺たちを裸にすることもでき…」

「変態」

「変態。」

「へ、変態！！」

「…変態。」

「うわ、みんな揃って！？」

「いや、だってそうだろ。つつかそんなこと言って実行されたらどうするんだ。」

「…ハルカちゃんなら……………」

「変態！変態！変態！変態！これからあなたのことは変態野郎って呼ぶから！」

……考えること自体は俺も考えなかったとは言わない。人間って煩惱まみれだし。でもそれを口に出すなよ。セクハラオヤジ。

「さて、考えるぞ。ここの魔力はどうなってる？ 変態野郎」

「変態野郎ー、焼き鳥買ってきてー」

「変態野郎、かき氷を買ってきなさい。どう、私に奴隷にされて嬉

しい？ 変態。」

…すっかり変態野郎で定着しましたとさ。

「……とりあえずだ、」

ひととおり会議を終えてタムラさんが結論を出す。

「よくわからんから、祭り楽しみつつ待機。油断はしないように。」
……それでいいのか？

第二十一話：祭り（後書き）

〓 次回予告 〓

「なんか久しぶりに戦わなかったな。」

「というか内容がほとんどないような気が……」

「やむをえんのだろう。変態野郎定着のためだ。」

「いや、さすがにそれは……」

次回、第二十二話『誓い』

「陽妖がかっこいいぞ」

第二十二話：誓い

始まったのは、突然だった。

いきなりあちこちで起こる爆発、次々と黒い影になって消えていく人々。そして人々がすべて消えるのと同時に起きたひととき大きな爆発の煙の中から、ゆっくりと奴が姿を現した。

「や。」

「楽しめたかい、僕のつくった祭りは。」

「んなわけねえだろ。」

陽妖が即答する。

「おや、四六時中隣の女の子の浴衣に見とれてたのは誰だい？」

「なっ……………！」

「いやあ、気にすることはないだろう。…好きなんだろ？」

「え、陽…妖…………？」

「ああ。」

少しの間をおいて、陽妖が告げる。

「そうだよ。俺はハルカが好きだ。」

スズキは静かに聞いている。

「だからこそ、…俺はこいつを守りたいんだ！ 守るって誓ったんだよ！！」

言うなり、巨大な光弾を放つ。スザクに止めを差した時よりも、強いような気がした。

そのまま起こる爆発、スズキが吹っ飛ぶのが見えた。同時に周りも変わって、俺達のすぐ後ろに階段が現れた。

「ヒカル！」

突然陽妖が呼ぶ。

「ハルカ連れて、上に行け！　…タムラさんたちも行ってくれ、ここは俺が何とかする。」

「陽妖、お前まさ——」

言いかけたところで、爆風で階段のところへ吹き飛ばされた。

「陽妖——」

次の瞬間、目の前が崩れて、陽妖もスズキも見えなくなった。

「そん…な…陽妖……？」

最初に口を開いたのはハルカちゃんだった。

「そんな…タムラさん！　このくらい、壊せますよね！？」

必死に、タムラさんに呼び掛けている。

「…確かに、消耗するが壊すことはできる。」

「じゃあ……！」

「だが、」

「……え？」

「……それは、あいつの意思に反することだ。」

「そ…それって……」

「あいつは、大切なお前を守りたいんだよ……今は、上に行くべきだ。」

「…そんな、そんなことしたら………陽妖が、死んじゃう！」

「ハルカちゃん。」

泣きじゃくるハルカちゃんに思わず声をかける。

「あいつが、そんな簡単に死ぬわけ…ないだろ？　今は上に進もう。きつと全部戦いが終わったあと、あいつは笑顔で上ってくるよ。」
「そうなる確率が低いのはわかりきっている。でも…」

「そう、だね……」

ハルカちゃんはずごく無理をしてるような感じで、涙でぐちゃぐちゃな顔で微笑んだんだ。

第二十二話：誓い（後書き）

〓 次回予告 〓

「陽妖…」

「陽妖も心配だが、まだ上に敵はいる。」

「……陽妖があんな命懸けなんだから、負けるわけにいきませんね。」

次回、第二十三話『二度と』

第二十三話：二度と

中国全土を支配する闇獣たちの目も届かない山奥で、一人修行する者がいた。嵐の中でも身を湿らすことなく跳ね回る。雷鳴が鳴り響いていると言うのに、むしろその1・21ジゴワットを浴びたいかのように駆け回る。いや、もはや駆け回ると言い方はふさわしくない。全身を黄色系の服で覆ったそれは、もはや人とは思えないような動きを見せる。空中で、空気を蹴るように跳ね上がり、空を舞う。もはや雷すらそれを引き立てる演出効果のようにして、飛ぶ。――そう、まるで……竜のように。大きな稲妻が空を駆け回る。そして、森の上を飛び回っていた黄色い竜の姿は消えた。俺たちは、陽妖にスズキを任せて上に向かっていた。不安は大きい、だが、その不安は陽妖が負けてスズキが追ってくることに對してではない。皆、口にこそ出さないが、陽妖が負けることは決してないと信じている。スズキより先に息絶えたとしても、絶対にスズキを倒すとわかっている。自らに呪いをかけてでも。むしろ、心配しているのはそちらの方だ。陽妖の命。刺し違えたり、自らの命を代償とした禁術を使ったり。絶対にハルカちゃんを守ると、そう決めている陽妖なら、そうせざるをえない状況になったら迷わずやるだろう。陽妖の家にはそういった術もあると聞いている。あいつは、陽妖は、死ぬ覚悟である道を塞いだんだ。それがわかっているからハルカちゃんは戻ろうとした、そして号泣した。そしてタムラさんも、きっと自分もユイさんのためならそれをするからだろう、わかっていたから皆を先導して上に向かった。陽妖の行動を、無駄にしないために。最高の選択肢ではない。でも、今の状況では、他の選択肢のリスクは高すぎる。陽妖にしても、本当は生きて、ハルカちゃんと一緒にいたいはずだ。それでも、ハルカちゃんを絶対に守るために、自分が盾になることを選んだ。実は、仲間が死地にいるというのに、心配する一方で安心している俺がいる。あんな行動

にでるほどハルカちゃんを大切に思っている陽妖には到底敵わないが、俺だってハルカちゃんが好きだから。陽妖がハルカちゃんを好きなのもなんとなくわかっていた。そのライバルである陽妖が消えて、大切な仲間なのに、少し安堵してしまっている自分がいる。それに対して激しい嫌悪を抱くが、自分を切り離すことはできない。

そのかわりに、もう二度とハルカちゃんにさっきのような涙を流させないようにしようと誓った。

第二十三話：二度と（後書き）

〓 次回予告 〓

「あの、1・21ジゴワットってやつぱり…?」

「影響されやすい作者だ。まあ話の流れとしては昔からあったらしいが…」

「というか映画もだいぶ前では？」

「最近DVDで見たようだ。」

次回、第二十三話『雷音』

「また雷か…」

第二十四話：雷

重苦しい空気の中、駆け足で階段を上ってゆく。薄暗い階段は長く長く、なかなか出口は見えない。

「まったく、何階分上がった？」

「さあな。」

「J・Jとタムラさんのやりとりも、これで何回目だろう。このままこの階段がどこまでも限りなく続いて行くんじゃないか。

……そう思った直後だった。

突然、激しい爆発音と振動。鼓膜を通して脳までも震えるような感覚。

「な、なんだ？」

「すぐ上だな。急ぐぞ。」

「はい！」

まだ残っている振動の余韻を振り切って全力で駆け上がる。もう疲れすら感じない。

踊り場を二度過ぎた先に、出口はあった――

「おいおい、なんの冗談だよ？」

思わず息を呑む。

「これは……」

タムラさんですら驚きの表情を浮かべている。

「壁が、崩れてる……？」

そう。ハルカちゃんが言ったそのまま。壁が崩れて巨大な穴が開き、大量の瓦礫が山を作っていた。

崩れた壁の向こう側にも部屋があるようで、だがそこから風が吹き込んでくるといことはもしかしたらその部屋のさらに向こう側、外壁から穴が出来ているのかもしれない。

「……………にゃあ？」

……………ん？ 今何か……………

「おい、今何か聞こえなかったか？」

「ああ。」

「にゃあ、って……………」

空耳じゃなかった。（汗）とか付けなくなる気分だよ。にゃあってなんだにゃあって。猫か。猫なのか。いや人の声だった。女の子？可愛い女の子じゃなかったらにゃあとかうざったいだけなわけだけども。

「にゃー。」

……………なんなんだよ。声は明らかに瓦礫の山の中から聞こえてくる。状況的に、常識じゃありえないけど何か外から壁を突き破って入ってきたと考えるのが一番しっくりきてしまう。ここビルの高層階だけど。そしてそれをした何かは部屋の中に他に何も無いからあの瓦礫の中に居るということになる。

……………でもにゃあって。にゃあとか言っても許されるような女の子がビルの壁を突き破って飛び込んでくる世界にいた覚えはないんだけど、魔術師ないしは何らかの能力者だったらおかしくはないと思ってしまっ自分怖い。

「お、おい……………」

なんだ「・」、瓦礫の中から女の子でも……………って。

「なん……………」

「……だと？」

そしてなんでタムラさんとハルカちゃんは二人でセリフ完成させてるのさ。

「あらあら、これはひどい。ライ、もう少しおしとやかに入ってきてよ。」

……もう突っ込みきれないよ。

状況を説明します。瓦礫の中から黄色い変な服を着た可愛い女の子が出てきて、さらに瓦礫の山の向こう側にあった上り階段から赤いドレスのきれいなお姉さんが出てきました。

……なにこれ。

「……にああ。」

第二十四話：雷（後書き）

〓〓 次回予告〓〓

「えっと、超展開過ぎませんか……？」

「前からだろ。」

「趣味入りすぎじゃないですか……？」

「いつものことだろ。」

「どうなるんだこれ……」

次回、第二十五話『鳳凰と黄竜・1』

第二十五話：鳳凰と黄竜・1

「えーっと、あなたたちが侵入者さんね。」

重苦しい沈黙を破ったのは、奥から出てきた赤いドレスの女性だった。

「新入社？」

…… またまた沈黙。

いや、フレッシャーじゃないよ。なんなのこの子、奥から出てきた人が話しかけてたつてことは光政の関係者なんだろうけど天然にも限度があるよ。ツッコミの苦勞を少しは考えてよ！

…… 失礼、取り乱しました。

「…… ああそうさ。そうなるんだろうな。」

いつの間にか「」がこのポジションに……

「貴女は？」

タムラさんの冷静さが怖い。まあこの人が冷静だから俺もギリギリでなんとかなってるわけだけでも。他がなあ……

「私は…… そうね、鳳凰とでも。そしてその娘が黄竜。私はライ
つて読んでるけどね。」

「にゃあ。ホアンライレイ黄頼雷。」

…… また沈黙。

「……なあ、その『にゃあ』って何なんだ？」
よく聞いた」・」。

「……にゃあ？」

いや、首かしげられましても。

「ライの口癖よ。誰のせいかだいたい予想はつくけど……」

「にゃあ。口癖。リヤイ……ライの。」

……噛んだ？ 噛んだよね今しかも自分の一人称。それが萌えなのかおい。

「とりあえず、侵入者さんにはお帰りいただきたいのだけど。」

「やなこった。」

「ならば、しょうがないわね。言うておくけど、ライは私と同じくらい強いわよ？」

「にゃあ、ライ強い。」

「ん、あんたの強さ知らんし。」

「そう。だったら……思い知りなさい！」

実際、この二人は強い。見た目通りというかなんとか、ドレスのお姉さん（鳳凰？）が炎、猫少女（黄竜？）が雷の能力者のようだ。

最初の叫びと同時に、鳳凰が炎をこちらに放ってきた。だが大きいものの威力は弱く速度も遅い。おそらくは威嚇用。とはいえ当たったらダメージを受けるわけだし、俺とハルカちゃんが右、「・」とタムラさんが左側に飛んで避ける。

すぐに体勢を立て直して、鳳凰の方に振り向く。……黄竜がいな

い。

「ヒカル！上だ！」

「Ｊ」の言葉が届くか届かないかのうちに飛び退く。小さな爆発。見ると、さっきまで俺がいたところがクレーターのようになっている。ああ、雷の落ちた跡ってこうなるんだよなあ……って怖いよ！能力は同じ雷系の白虎とは桁違いのようだ。当たったらまずいな。「にゃー、逃がさない。」

……非常識には慣れてきたつもりだったけど、まだまだだった。黄竜が空中で向きを変え、こちらに突っ込んでくる。

「くっ……」

咄嗟に光弾でそらす。そしてもう一発、同じところに。

「どこ狙ってるの？ ……いくよ」

黄竜が突っ込んでくる。速い。……だが。

「発動！」

「にゃっ……？」

光弾のところに飛ぶ。……そう、ちょうど背後。

「……悪いね。」

思い切り光弾を撃ち込んだ。

第二十五話：鳳凰と黄竜・1（後書き）

〓〓次回予告〓〓

どうも、前田広大です。

今回、数少ない読者の皆様に申し上げておかないとならない非常に重要なことがあり、予告スペースを使わせていただきます。

私はここに宣言します……

ライは俺の嫁！

「……なんなんだよこいつは。」

次回、第二十六話『鳳凰と黄竜・2』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2684i/>

光に向かって

2011年11月21日17時04分発行